Mr. Bassman（ベースマン列伝） Vol.10

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変･･･。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥ぐともの凄い名演･名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Jimmy Blanton【ジミー・ブラントン】

from『DUKE ELLINGTON - The JIMMY BLANTON era』

Profile

1918 年 10 月、テネシー州チャタヌーガ生まれ（1918 年 10 月 5 日生まれという説や 1921 年ミズーリ州セントルイス生まれという説もある･･･）。ピアニストで自己のバンドも率いていた母親の影響で幼少期にヴァイオリンを始める。テネシー州立大に通っている頃にベースに転向し、バグス・ロバーツとジョー・スミスが率いる地元のバンドで活動する傍ら、休みの期間はフェイト・マラブルのバンドでリヴァーボートの上で演奏し腕を磨く。大学 3 年目の年にセントルイスに移り、37 年に初レコーディングを行ったジェター＝ピラーズ・オーケストラに加入（この頃は 3 弦のベースを弾いていたと言われる）。その後、フェイト・マラブル楽団でも活動していたが、39 年の秋に地元セントルイスで人気を誇っていたバンド“ブルー・デビルズ”で演奏中に、同地にコンサートで訪れていたデューク・エリントンに見出され楽団に雇われる。エリントン楽団ではエリントンとデュオでレコーディングを行ったり、ベン・ウェブスターと共に“ブラントン / ウェブスター・バンド”として人気を誇り、“モダン・ベースの開祖”と称される。41 年後半にエリントン楽団でツアー中に体調を崩し、ロサンゼルス病院に入院。翌 42 年春に先天的な結核と診断されたブラントンはやむなくカリフォルニアのデュアルテ・サナトリウムに入り、人生最後の数ヶ月を送った。1942 年 7 月 30 日カリフォルニアのモンロビアで死去（1941 年 7 月 30 日死去という説もある･･･）。享年 23 歳。誕生日と亡くなった日付について諸説あるが、いずれにしても 20 代前半で亡くなったことには間違いない。

20 代前半で夭逝した伝説のジャズ・ベースマン

≪モダン・ベースの開祖≫

1942 年に 23 歳という若さでこの世を去るも、ピチカート（指弾き）とアルコ（弓弾き）を弾きこなし、その歌心溢れるベース・ラインとアドリブ・ソロでジャズ・ベース界に革命をもたらした偉大なるベースマン、ジミー・ブラントン。現時点で、この世に残されているジミーの音源は、エリントン楽団在籍時 1939 年 10 月 14 日から 1941 年 9 月 26 日までのセッションのみ。

1939 年の秋にデューク･エリントン楽団に加入したジミーは、当初それまでのレギュラー･ベーシストであったビリー･テイラーとツイン・ベースでプレイしていたが、ジミーのズバ抜けたセンスとテクニックの凄さを痛感したビリー・テイラーは、その数ヵ月後の 1940 年 1 月頃に静かにエリントン楽団を去っていったというエピソードも残されている。また、ジミーの夭逝後にエリントン楽団に加入したベーシストのウェンデル・マーシャルはジミーとはいとこ同志の関係にあった。

エリントン楽団での在籍期間は僅か 2 年余りだが、オスカー・ペティフォード、レイ・ブラウン、チャールス・ミンガス、ポール・チェンバース～クリスチャン・マクブライドなど、後に続いた後輩のジャズ・ベースマンたちに与えた影響の大きさは計り知れない。そして、本誌『The Walker's』ゆかりのベースマン、リロイ・ヴィネガーもシカゴとインディアナポリスで切磋琢磨していた若い頃に最も影響を受けたベーシストとしてジミー・ブラントンの名を挙げている。

≪マイルス・デイビスとの接点≫

マイルスの自叙伝『マイルス･デイビス自叙伝 I』（宝島社文庫）に、ジミーがエリントンに雇われた経緯が記されている。17 歳当時セントルイスで音楽活動を行っていたマイルスが、地元の「ランブギー・クラブ」でエディ・ランドールのバンド“ブルー・デビルズ”のオーディションを受けて見事合格するのだが、その数年前に“ブルー・デビルズ”でベースを弾いていたのがジミーで、セントルイスにコンサートで訪れていたエリントンがその場でスカウトしたという。マイルスとジミーの共演こそなかったが、2 人は“ブルー・デビルズ”の先輩後輩の関係にある。

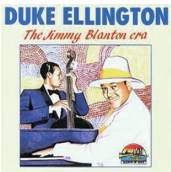
≪ジミー・ブラントン出現前のベースマン達≫

ジャズ・ベース界に革命をもたらせたジミーの出現は、エリントン楽団加入前後の 1930 年代後半。ジミーの登場までは、アルコ（弓弾き）とオクターヴ・ユニゾンするハミングで人気を博したスラム・スチュアートや 37 年に自己のセクステットを結成したジョン・カービー。1929 年にジャズ・ベーシストとして初めてリーダー・セッションを録音したウォルター・ペイジ。そして、ジミーにとってはエリントン楽団の大先輩であり、アンプのない時代にスラッピング奏法などで大きな音を響かせ活躍していたウェルマン・ブロードなどがいた。

JB's Featured Album

ソロ名義の作品はなく、その偉業を知るにはエリントン楽団での名演を聴くのみだが、“モダン・ベースの開祖”と称されたその伝説のベース・ワークは今の時代でも美しく光り輝いている。

スバリ！『ジミー・ブラントン時代』と題されたジミー大フィーチャーの一枚



The Jimmy Blanton era
Duke Ellington
(Giants Of Jazz：CD53048) [Import]

Duke Ellington (p), Jimmy Blanton (b), Wallace Jones (tp), Rex Stewart (cn), Lawrence Brown, Joe Nanton (tb), etc

1. In A Mellotone 2. Ko-Ko 3. Jack The Bear 4. Harlem Air Shaft 5. Just A-Settin' And A-Rockin' 6. Sepia Panorama Jim 7. Jumpin' Punkins 8. Mr. J.B. Blues, etc (9. ~ 23.)

筆者が初めて手にしたジミーの音源でもあり、『ジミー・ブラントン時代』と題されたタイトルにジミーと親分エリントンのイラストも印象深い。「Giants Of Jazz」いう海外のレーベルからリリースされた作品で、1939 年 10 月 14 日から 1941 年 9 月 26 日までの 14 セッション、全 23 曲が収録されている。廉価な海外盤に多いジャケットのみで解説部の裏面は白紙という代物とは違い、エリントンとジミーの年表が細かく書かれており、曲目と演奏者の名もしっかりと記され、おまけにジミーがベースを爪弾いている写真（左頁参照）も掲載という親切さにも感動。目玉はジミーとエリントンの共作でジミーの名をタイトルにした「Mr. J.B. Blues」はじめ、エリントンとジミーのデュオ 5 曲収録！

エリントン楽団のボストンでのライヴ演奏を収めた一枚。ジミーのプレイも渋い！

The Duke In Boston 1939-1940
Duke Ellington
(Storyville) [Import]

Duke Ellington (p), Jimmy Blanton, Billy Taylor (b), Ivie Anderson, Herb Jeffries (vo), Johnny Hodges (ss, as), etc

1. East St. Louis Toodle-Oo 2. Jazz Potpourri 3. Something to Live For 4. Old King Dooji 5. In a Mizz 6. Rose of the Rio Grande 7. Pussy Willow 8. You Can Count on Me, etc (9. ~ 18.)

エリントン楽団のボストンでのライヴ演奏を収めたアルバムで全 18 曲収録。前半は 1939 年 8 月 12 日、場所は「リッツ・カールトン・ホテル」。後半は 1940 年 1 月 9 日、場所は「サウスランド・シアター・レストラン」での演奏で、元々 NBC ラジオ放送用に録音された音源だ。前半 39 年のライヴではビリー・テイラーがベースを弾いており、後半 40 年のライヴでベースを弾いているのがジミーだ。アイヴィ・アンダーソン、ハーブ・ジェフリーズといったヴォーカリストの他、ジョニー・ホッジス (ss, as) やクーチー・ウィリアムス (tp) 等、この時期お馴染みのメンバーが名を連ねる貴重なライヴ音源。エリントンのリズム感を感じさせる左手を写したジャケットのデザインも斬新でカッコいい！

注目はエリントンとジミーのデュオ！別テイク含めて九曲もの名演が！

Solos, Duets and Trios
Duke Ellington
(RCA) [Import]

Duke Ellington, Billy Strayhorn (p), Jimmy Blanton, Junior Raglin, Larry Gales (b), Earl Hines (vo, p), Sonny Greer, Ben Riley (ds)

1. Tonk 2. Drawing Room Blues 3. Frankie And Johnny 4. Jumpin' Room Only 5. Lots O' Fingers 6. Dear Old Southland (Take 1) 7. Solitude (Take 1) 8. Solitude (Take 2), etc (9. ~ 21.)

エリントンのソロ、デュオ、トリオの名演を厳選収録した全 21 曲。注目は左に紹介している『The Jimmy Blanton Era』で触れている エリントンとジミーのデュオ「Mr. J.B. Blues」のテイク 1 &テイク 2 の別ヴァージョンが聴けるところ。テイク 1 はテーマの後のベース・ソロがピチカート（指弾き）で、テイク 2 はアルコ（弓弾き）で演奏されている。その他エリントンとジミーのデュオ 4 曲が 5 つの別テイクを含めて 9 曲も収められているのだ！ 勿論、このデュオだけでなく、エリントンのトリオ演奏とピアノ・ソロも堪能できるという楽しみもあるこの作品。当時から“デューク”という名前の通り別格扱いだった偉大なエリントンとベース 1 本でデュオ演奏を残しているジミーはやはり伝説にふさわしい男だ。

JB's Support Album

参加作品が少なく、エリントン関連の作品に限られてしまうため、同様の内容で曲数や組数違いのアルバムを紹介せざるを得ないが、それぞれお気に入りの作品を見つけて欲しい！

Complete Columbia and RCA Victor Sessions/Duke Ellington
(Definitive) [Import]

エリントン・オーケストラが Columbia と RCA に残したセッションを完全収録。ベン・ウェブスター (ts) が在籍し、“Featuring Jimmy Blanton”と記されている 4 枚組、全 88 曲を収録した作品。

The Blanton-Webster Band
Duke Ellington
(RCA) [Import]

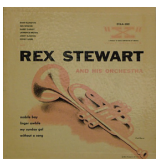
金色で描かれたエリントンの顔のイラストとピアノの鍵盤があしらわれたジャケットも印象的な米国版の 3 枚組作品。ジミーとベン・ウェブスター (ts) が在籍していた時代のエリントン楽団の名演 66 曲を収録。

This One's For Blanton!
Duke Ellington/Ray Brown
(ビクターエンタテイメント：VICJ-41680)

デューク・エリントン (p) とレイ・ブラウン (b) がジミーに捧げた歴史的デュオ・アルバム。「ピター・パンサー・パター」は、1940 年にエリントンとジミーがデュオで録音したナンバー。1972 年録音。必聴！

Never No Lament: Blanton-Webster Band 1940-1942
Duke Ellington
(BMG JAPAN：BVCJ-38049)

ジミーやベン・ウェブスター (ts) が大活躍した時代、1940~42 年のエリントン楽団の演奏を集大成した国内盤 3 枚組ボックス・セット。エリントンのデュオをはじめ、ジミーのベースがたっぷりと堪能できる。



Rex Stewart and his Orchestra
Rex Stewart and his Orchestra
(RCA) [Import]

1940 年 11 月にシカゴで録音されたレックス・スチュアート (tp) 名義の作品。ベースは勿論だが、デューク・エリントン (p) やベン・ウェブスター (ts) も参加した 7 人編成のオーケストラによる全 4 曲を収録。

Fantasista! あしたのジャズ
Various Artists
(NAXOS/TOWER RECORDS：TWJZ-1)

本誌発行人＆編集人が構成・解説・コンパイルを担当した 6 枚組 7 時間超のタワー・オリジナルの本格ジャズ企画盤！ジミーとエリントンのデュオ 2 曲とエリントン楽団による「C ジャム・ブルース」収録。